

研究

横川先生と佐伯 (六)

「郷土の研究」に学ぶもの

会員 山本 保

長らく休載していましたが、今回は、資源について紹介いたします。

六 郷土の資源 (その2)

横川末吉「郷土の研究」

中岳川(宇目町)右岸の林道は役目を終って、今更一志捨てられていますが、現在、傾山園育林に向かつて、西山川に沿う林道が鋭意開かれています。既に、御泊から奥へ四峠にも通じました。

あの勇ましい傾山の大原始林が、祖国の復興に役立つのです。

すでに、営林署の人々が、西山川と中岳川の合流部に住宅を造っています。西山にも、十戸ほど林業本位の生活をする人たちが入りこんでいるそうです。

国家が強力で、しかも科学的に計画的に開発することを、皆で希望しましょう。

木浦鉦山の歴史は古いそうです。傾山(一六。五九)の石英斑

岩と古生層のふれた所に発達したと思われます。石灰岩の互層のある古生層に含まれているようです。学問的には、なかなかおもしろく、ことに学生の実地研究には持ってこいというわけで、毎年、前途のある学生が数人、木浦に来るそうです。

江戸時代には、竹田の中川氏(藩主)の金庫として大切にされました。

宇目の郷五千石の米は、険しい山路を牛の背で、この山の中に送られました。村の入口に近い庄屋の家には、広い牛つなぎ場もあり、大きな米蔵もあって、鉦夫に配給する米を入れています。

今でも、小野市の木浦以外の部落の人たちは、「木浦の人は頭が高い」と言います。それほどに竹田藩(七折石)から保護されてきました。

錫と主産物としました。他のほとんど、すべての金属も少量は出ると聞きました。

明治時代への変動期には、この保護はなくなりました。

人々はかなり離散したようですが、今でもりばな石垣だけが、左屋敷跡を見ることが出来ます。七十戸ほどは、とにかく落ちついて、半農半鉦の細々とした生活を続けました。

錫の外は、亜硫酸を掘ったのは、農薬として新しい運命を開こうとしたためでした。

この鉦山が、戦争前の好況のため、一時活気を帯び、花々しく活動し、戦後は、たちまち元の姿にかえったことを話しましょう。

昭和十年ごろから、木浦町の奥に、二百家族も入れた大きな鉦山の村ができました。五分ボルトの変圧器

もすえられました。

木浦鉾山側でも、別の会社が大规模に採掘しました。この二つの会社が、互いに競争した時の威勢のよい話、羊皮、おとぎ話のように伝えられています。

山の神のお祭には、酒を魚をお客をと、にぎやかに行いだ山も村も、今更、元の静けさにかえりました。

木浦市の奥の村は、すっかり取払われました。五百ポルトの炭圧器が、重岡・小野市に電力を切換えるために使われているだけになりました。

木浦鉾山の町めいた所を少し南に登ると、ちよつと離れて鉾山の長屋があります。くすぶつた家には、住んでいる人も少ないようですし、古い事務所の残れをかラスは、寂しく目にうつりました。山にかかると、かや原が所々粗末な畑に変わっていました。

木浦中学校の大野先生へ元宇目町教育長へのお話では、今また、木浦の人々の中に、農業に転向する努力が懸命に続けられているそうです。

明治の初期と似てはいませんか。

横岳の石灰岩のかけば、といでのように残された廃坑は、雨の日には、石ころを落として、はるばる真弓から通学する生徒を苦しめるのみとなりました。

あわれな鉾山町の盛衰ではありませんか。では、どうして鉾山は、こんなに盛衰するのでしょうか。

掘りつくすと、新たに生産できないのも、一つの原因でしょう。

国家の運命が戦争に突入した時は、狂気のようには資源を求めたその恐ろしい戦争が、鉾山に一時的な電光のような、にぎわいを与えたのではなかったでしょう。日本人全体の幸福のために、日本人全体が研究し調査して、国の資源を開発しなかつたのが、もつと大

きな原因ではないでしょうか。

上野村（赤生町）の番五橋の近くにある水銀鉾山のいたましい姿に、心から憤りと憤え打つ人は少ないでしょう。資源の浪費、尊い生命の犠牲を思う度には、私は、国の歩みは国民全部の意志によって決定されねばならぬと思えます。

戦後の石灰岩の利用は、水浦の衰弱、水銀鉾の死滅、淡海井のまんがん鉾の廃止の後をうけて、地下資源の郷土における唯一の注意すべきものではないでしょうか。

因屋の入口も風戸にかまをすえて、盛んに焼いています。

建築材料の外に、肥料として、近ごろ、とても重要視されています。海崎のセメント工場は、更に、大規模に狩生の奥で石灰岩を掘っています。近代式の設備を整えています。石灰岩そのものはあまり多くはないそうです。

既に、蒲戸から海上輸送していた所も原石も掘りつくした今日、セメント会社は石灰を北九州に仰ぐうちに、石灰岩を津久見に求める立場の不幸に苦しんでいます。天然資源は、あまり恵まれていない郷土の米慮をよく理解したうえで、その対策を研究することがたいせつだと思えます。

「郷土の研究」の目次は次の通りでした。

一 郷土の自然

イ、海岸はなせ出入りが多いでしょう。

ロ、平野も台地の少ない地形

ハ、気候を研究しましょう

二 郷土の災害

三 郷土の農業

イ、田はどんなに分布しているでしょう
ロ、畑を研究しましょう

ハ、原野はどんなに利用されていますか

四 郷土の交通
五 郷土の生活

イ、山の生活を調べましょう

ロ、海岸の生活を見ましょう

ハ、平野の生活はどんなでしょう

郷土の資源
結び

更に「序」では次のように述べています。

一、この小研究は、新制中学校の生徒諸君の課外読
みものとして書きました。

一、研究した地域は佐伯市、南海郡、それに小野
市村と重岡村を含んでいます。
(讀者注—この当時、両村は大野郡に属していた)

一、社会科学の学習の参考になるようにと志しました
ので、歴史發展と相互関連とを重視しました。

一、この研究は、なるべく私の实地調査を基礎とし、
直観によって述べることにしました。

一、したがって、統計的な資料などは、別の機会に
ゆずりたいと思います。

一、この書を読まれる方は、建設省地理調査所五万
分の一地圖佐伯、臼杵、蒲江、熊田、三重町、

鶴見崎を参照されることを望みます。

一、この小研究を佐伯在職二十年の記念と感謝に代
えたいと思います。

昭和二十四年一月

横川 末吉

七の「結び」は左の通りです。

私(注横川末吉氏、この郷土の研究を皆さん(中学生)の学習の参考になるようにと想ってかきました)が、研究は勿論十分でもないし、また終つておいてもいせん。十分でもない、終つてもない私の研究は、これを踏み台にして、それだけよつとよいことを研究する時に、目的を違ふと思ひます。

私は、社会科学の研究では、世の中はどんなに変わつてゆくかを实地について理解すること、それぞ水社会にある事は、お互いに連絡し、関係しているといふことを理解することが、たいせつだと思ひます。

皆さんは、この書を読み終つて、私が理解していただきたいと思ふことが、おわかりになつたでしょうか。
(以上)

熊本管林局の管轄下にある佐伯管林署(佐伯市中西町) 佐伯担当区事務所(全野岡)、青山担当区事務所(青山)、山口担当区事務所(合川)、新木場(鶴谷区)、直川担当区事務所(赤木)、本庄担当区事務所(因尾)、延岡管林署(重岡)、延岡管林署大原担当区事務所(宇野大原)、赤松製紙事業所(切込)、小野市担当区事務所(小野市)等が、佐伯市・直川村・本庄村・宇野町にある国有林の経営・管理に当たっています。

佐伯市灘、入江橋近くの山沿いにも、次のような標識板が建てられています。

国有林

一、草木を愛しましょう。

一、材木は、國の大事を資源です。

一、林中では、たき火をやめましょう。

一、煙草の火に注意しましょう。

一、国有林内にはいるときは、入林許可をうけて下さい。

熊本 佐伯 養林署

昭和四十九年茂の佐伯市・南海部郡の造林事業計画は、左の通りでした。県佐伯事務所のもよめによれば、総造林面積は八百十二畝で、其の内訳は、拡大造林六百三十一畝、育林地三十一畝、広葉樹改良による造林四十五畝、木伐切り出し跡の再造林五畝です。

所別別では、宇目所が二百九十六畝、トッポで、本庄材の百五十畝、蒲江所百四畝、佐伯市北十六畝、直川村七十二畝などの順になっています。

造林事業は、林業構造改善などにより、林道も作業道が整備され、近年大幅に伸びてきました。しかし、各市町村とも森林劣勢が不足が深刻で、下刈作業などの管理が心配されています。

県佐伯事務所では、造林の省力化を進める一方、市町村に労働力の確保、公社造林の推進、森林劣勢者の待遇改善を呼びかけています。

わたしたちは、郷土の自然を守り、緑豊かな地域の維持に努力したいものです。

(註)

郷土の先覚者

① 曾根茂夫

佐伯市海崎、大宮八幡社近くの山(セメント工場裏山)に、次のような鎮徳碑があります。(自然石)

曾根茂夫翁

佐伯市長出納菊二郎書

(正面文字) 別の石碑の分

曾根茂夫翁は、明治十三年八月八日大分県南海部郡上浦町浅海井網元兼酒造家曾根南太郎の二男に生まれました。同三十一年県立臼杵農学校水産科を卒業後、県水産学校に奉職、病の為二年余で辞した。

翁は天資穎悟聰明で仁侠の情豪故の氣を有し、稜梁の器であつた。

同三十四年鷗志を抱き渡満し二年余大連で活躍の後台湾に移り、山一商行に入社、拮据精勵十数年、同商会の實権を握るに及び、大株主として日本セメント株式会社を経営に参画した。

翁は夙に實業の將來性に着目し、大正十二年九月専務取締役に就任するや郷土の發展も考へ、新工場地に佐伯市戸尻を選んだ。同十三年十一月起工、十五年四月操業を開始したが、昭和二年の金融大恐慌の渦中、経営を浅野セメント株式会社に委託し退任、再び渡台し、日本共立興業台北支店長になり、活躍中終戦に遭ひ帰國した。

浅野セメント株式会社は、昭和二十二年日本セメント株式会社と改称し、社運日に榮え佐伯工場は地域の發展に貢献した。立者翁の功績を偲び、ここに報恩謝徳の碑を建てた。

(裏面文字)

世話人 高林伝男 柴田徳太郎 小西今朝治

新納守七郎 豊田博夫 大島 光

山本繁道 文鶴文雄 安部喜代二

昭和三十三年十月建之

区長 木村 賢 選文 高林伝男
撰文揮毫 西元初雄 彫字 宮谷藩太郎

② 村上弘一

佐伯市港又、二平合板株式会社正門左側には、故村上弘一氏（三平合板前社長）の胸像が建てられ、台石には次の文字が刻みこまれています。（須徳碑）

（正面文字）

氏は明治二十八年生をうく、

人となり誠実無比。長じて産業報国の大志を抱き、渡韓し、後慧眼よく現地（港又）と遊び、合板の事業を起すや精励格闘、終多苦難の重圧を克服し、ついにわが国輸出界に不拔の地歩を築く。

惜しむべし。業中（年齢古稀（七十歳）に満ちずして没す。茲に氏の卓抜せる偉業を称え、之を青史に伝えて永く後人の範となさんと欲し、仰徳の碑を建つ。

昭和四十一年六月

建立發起人代表

佐伯市長 出納 菊 二郎

③ 内田治助

佐伯市塩屋、内田林業株式会社庭園内には、故内田治助翁の胸像が安置されていますが、その碑銘文は左の通りです。

翁は明治二十七年生を佐伯市池田に享く。

人となり誠実温厚、長じて雄心勃勃々。

大正十三年製材の業を起す。

推されて佐伯商工会議所会頭に任じ、商工業の振興發展に力を捧げ、地方自治、厚生保護、社会福祉に關与し、歴々の要職につき、功績顕著にして賞勲重なる。茲にその栄誉を称え、これを後昆に伝えるため、この碑を建つ。

昭和四十二年十月

佐伯商工会議所

会頭 高山 善 吉謹誌

農業政策、二百カイリ水域、資源小国等々の諸問題を抱え、安定生長下の現在、わたくしたちは、原点に還って、これから生きのびて行くという道を選択しなければならぬと思ひます。

（おわり）

記録

わがふるさと、元田誌、(九)

—— 道路と河川 ——

会員 市野 瀬 仁

道路

一 国道

(1) 国道一〇号線

国道一〇号線の敷設は、わが國の高産成長の波に乗じて、昭和三十六、七年から、全国的な道路建設の一環として行なわれた。

道路の構造は、旧国道の幅員を拓けて車道六・五メートル、全幅員八メートル、地表面のアスファルト舗装は、厚さ五センチの近代的水枝術でできあがっている。この付近では、植松と、尺間と黒土に旧国道の一部が残っているの、後世の人々の誇り草となるであろう。